

【目的】食器の研究としては、これまでに所有品目等を把握するための研究はなされ、それによると種類や量に関しては家族構成や年代よりも主婦の生活意識が大きく影響を与えているという結果が得られている。そこで、本研究では人間の側からアプローチした調査を行い、主婦の意識の上で住生活における食器の位置付けがどの様であるかを求め、今後の食事空間のあり方を探る。

【方法】奈良市内を中心に、主婦を対象とし、質問紙、自記式、留置法によるアンケート調査を行った。調査期間は1992年8月21日～9月2日とし、有効数338票を得た。内容は属性、生活意識及び行動、食器に対する意識（関心度、機能に対する考え方、嗜好等）および使用実態についての質問項目からなる構成とした。

【結果】食器に関心があると答えた人は全体の約9割を占めた。「室内装飾に工夫を凝らす方」と答えた人の内52.2%、「料理をするのは好き」では46.9%の人から、食器に対し「非常に関心ある」という回答を得ており、これらの結果は $\chi^2$ 検定においても高水準の有意差が認められた。更に、数量化第II類を用い食器に対する関心度に与える要因を分析した結果においても、これらの項目は高得点を示し、生活行動や意識が影響を及ぼしていることが明らかとなっている。また、住まいに対して「機能性を重視する」と答えた人は、食器に対しても「使い易さを重視する」という傾向があるなど、住まいと食器に対して求められるものには共通性が見出せる。生活意識の高い人ほど食器に対する意識が高く、そのような人は食器の道具としての面だけでなく、インテリア性をも認識しているといえる。